第二講　演習問題(2)

光源氏との間に姫君をもうけた明石の君は、三歳になる姫君とともに、明石から、都の西、大堰（おおい）の山荘に移り住んだ。源氏が、自邸の二条院近くの東院に入るよう要請していたからである。明石の君は、月に二度ほど仏事にかこつけた源氏の訪問を受けているが、源氏は、自分と妻である紫の上のもとに姫君を引き取ることを考えていた。次の文章は、そのような源氏を明石の君が迎えたある日の場面である。よく読んで、後の問に答えよ。

冬になりゆくままに、川づらの住まひいとど心細さまさりて、上の空なる心地のみしつつ明かし暮らすを、*君も、「なほかくてはえ過ぐさじ。*かの近き所に思ひ立ちね」とすすめたまへど、[1]つらきところ多く試みはてむも残りなき心地すべきを、いかに言ひてかなどいふやうに思ひ乱れたり。「さらばこの若君を。かくてのみは便なきことなり。*思ふ心あればかたじけなし。*対に聞きおきて常にゆかしがるを、しばし見ならはさせて、*袴着のことなども、人知れぬさまならずしなさむとなむ思ふ」と、まめやかに語らひたまふ。さ思すらむ、と思ひわたることなれば、いとど胸つぶれぬ。

「あらためてやんごとなき方にもてなされたまふとも、[2]人の漏り聞かむことは、なかなかにやつくろひがたく思されむ」とて放ちがたく思ひたる、[3]ことわりにはあれど、「うしろやすからぬ方にやなどはな疑ひたまひそ。かしこには年経ぬれ

ど[4]かかる人もなきが、さうざうしくおぼゆるままに、*前斎宮のおとなびものしたまふをだにこそあながちに扱ひきこゆめれば、ましてかく憎みがたげなめるほどを、おろかには見放つまじき心ばへに」など、女君の御ありさまの思ふやうなることも語りたまふ。

げに、いにしへは、いかばかりのことに定まりたまふべきにかと、伝(つて)にもほの聞こえし御心のなごりなく静まりたまへるは、おぼろけの御宿世にもあらず、[5]人の御ありさまもここらの御中にすぐれたまへるにこそは、と思ひやられて、[6]数ならぬ人の並びきこゆべきおぼえにもあらぬを、さすがに、立ち出でて、人も[7]めざましと思すことやあらむ、わが身はとてもかくても同じこと、生ひ先遠き人の御上もつひにはかの御心にかかるべきにこそあめれ、さりとならば、げにかう何心なきほどにや譲り［　　］まし、と思ふ、また、手を放ちてうしろめたからむこと、つれづれも慰む方なくては、いかがは明かし暮らすべからむ、何につけてかたまさかの御立ち寄りもあらむ、など、さまざまに思ひ乱るるに、身のうきこと限りなし。

（『源氏物語』　薄雲巻）

注　＊君…光源氏。
＊かの近き所…東院。

＊思ふ心…姫君を将来后にしたいという考え。
＊対…ここでは、紫の上をさす。
＊袴着…ここでは、姫君が初めて袴を着ける儀式。
＊前斎宮…亡き六条御息所の娘。光源氏は養女として引き取っている。この時、二十二歳。紫の上は二十三歳。

問一 傍線部1「つらきところ多く試みはてむも残りなき心地すべき」には、「宿かへて待つにも見えずなりぬればつらきところの多くもあるかな」という和歌がふまえられているが、この歌を参考にして解釈すると、この「心地」とはどのような「心地」と考えられるか。最適なものを次の①～⑤から選べ。

① 光源氏からの転居の要請を断ってみても、大堰の地に長くは住んでいられないだろうという「心地」。
② 転居を続けるにつけても、これまで以上に悲しみを味わい尽くして絶望的になってしまうという「心地」。
③ 自分と姫君についての結論を先延ばしにすることがむずかしく、決断までもう時間がないという「心地」。
④ 光源氏の心を試してみても、長い将来を期待することができず、人生の晩年が近づいてきたという「心地」。
⑤ 姫君を手元においた光源氏との駆け引きを続けるには、あとわずかの時間しか残されていないという「心地」。

問二 傍線部2「人の漏り聞かむこと」とあるが、その内容はどのようなことか。最適なものを次の①～⑤から選べ。

① 明石の姫君の母親が、実は紫の上ではなく、明石の君であるということ。
② 光源氏が、むりやり明石の君と姫君を引き離すようなことをしたということ。
③ 紫の上は、実は姫君をかわいがる気持ちがなく、冷たくしているということ。
④ 光源氏が、姫君だけを大切にして明石の君を軽々しく扱っているということ。
⑤ 光源氏と紫の上は、実は明石の君から強引に姫君を押しつけられたということ。

問三　傍線部3「ことわり」、7「めざまし」の意味として最適なものを、それぞれ次の①～⑤から選べ。

3「ことわり」

①　判断　　②　道理　　③　拒絶

④　躊躇　　⑤　妥協

7「めざまし」

①　すばらしい　　②　驚異的だ　　③　満足だ

④　情けない　　⑤　心外だ

問四　傍線部4「かかる人」と同じ人物を表わす語句を、この後の文中から抜き出せ（五字から八字）。

問五 傍線部5「人」、6「数ならぬ人」は、それぞれ誰を指すか。次の①〜⑤からそれぞれ正しいものを選べ。

5「人」

① 光源氏　② 紫の上　③ 明石の君
④ 明石の姫君　⑤ 世間の人

6「数ならぬ人」

① 光源氏　② 紫の上　③ 明石の君
④ 明石の姫君　⑤ 世間の人

問六 □に入れるべき語として最適なものを次の①〜⑤から選べ。

① おはし　② たまは　③ たまひ
④ たまふ　⑤ きこえ

問七　本文の内容として、正しくないものを、次の①〜⑤から一つ選べ。

①　光源氏は、前斎宮のことを引き合いに紫の上の世話好きな性格を伝え、明石の姫君を託してもけっして心配ではないと強調している。

②　光源氏が数多くの女性と付き合いながら、紫の上を重んじているのは、それだけ紫の上がすぐれているからだと、明石の君は思っている。

③　光源氏は、明石の姫君の将来のため、できるだけ早く自分と紫の上のもとに姫君を引き取りたいと考え、明石の君を説得しようとしている。

④　明石の君は、あくまで娘の将来を第一に考え、自分自身がどうなるかは宿世に任せるほかはないという、けなげな母親らしい決断を下している。

⑤　明石の君が娘を光源氏に託す決断ができないでいるのは、一つには、娘と離れた場合、光源氏の訪問が途絶えることを懸念しているからである。

第二講

〈模範解答〉

問一　②
問二　①
問三　3　②　7　⑤
問四　生ひ先遠き人（六字）
問五　5　②　6　③
問六　⑤
問七　④

〈現代語訳〉

冬になってゆくにつれて、川のほとりの住まいはますます心細さがつのって、あてのない感じばかりしながら（明石の君が）日々を過ごすのを、光源氏も、「やはりこのままでは暮らしていけないだろう。例の（二条院に）近い所〔＝東院〕に（移ることを）決心してしまいなさい」とすすめなさるけれど、（住まいを変えて待っても源氏は訪ねてきてくれなくなってしまうのだから、そんな）恨めしい住まいをたくさん試しつくしてしまうとしたらそれも後がない絶望的な気持ちがするに違いないので、（その時は）どのように言って（恨んだらよいのか）などというように（明石の君は）思い乱れている。（源氏は）「それならばこの若君〔＝姫君〕を（引き取らせてほしい）。（こんなところで）こうしてばかりでは不都合なことである。（姫君を将来后にしたいと）思う気持ちがあるので（このままでは）恐れ多い。紫の上も承知していて（姫君に）いつも会いたがっているので、しばらく近くで慣れさせて、袴着のことなども、人に知られない様子ではなく（盛大に）したいと思う」と、真剣に相談なさる。そのように（源氏は）お思いになっているだろう、とずっと思っていることなので、（明石の君は）ますま

す胸がしめつけられた。

（明石の君が）「（姫君が）今さらのように高貴な方に扱われなさるとしても、（姫君の実母は紫の上ではなく、私のような身分の低い者だと）人が漏れ聞くようなことは、かえってとりつくろえないと自然とお思いになるかもしれない」と思って（姫君を）手放せないと思っているのは、道理ではあるけれど、「安心できない方であろうかなどとはお疑いなさるな。あちら〔＝紫の上〕には何年も経ったけれどこういう人〔＝姫君（のような子）〕もいないのが、物足りなく思われるので、前斎宮が大人になっていらっしゃるのをさえ無理にお世話申し上げているようなので、ましてこの（姫君のように）憎めなさそうな年齢（の子）を、おろそかには見捨てることのできない性分で」などと、（源氏は）女君〔＝紫の上〕のご様子が望みどおりであることも話しなさる。

（明石の君は）「なるほど、かつては、どれほどのこと（があればその女性のもと）に落ち着きなさるつもりであろうかと、人づてにもうすうす耳にした（源氏の好色な）お心がすっかり静まりなさっているということは、（源氏と紫の上との関係が）並々のご宿縁でもなく、（紫の上の）人柄のご様子も多くの（女性たちの）中で際立ちなさっているのであろうよ」、と自然と推測されて、「物の数ではない人（である自分）が（紫の上と）肩を並べ申し上げることができる寵愛（を源氏から受けるの）でもないのに、そうはいってもやはり、のこのこ出て行って、その人〔＝紫の上〕も心外だとお思いになることがあるかもしれない、私自身（の身分が低いこと）はどちらにしても同じこと、将来が長い人〔＝姫君〕のご境遇も結局はあの（紫の上の）お気持ちにかかっているに違いないのであるようだ、そうだとするならば、本当にこのように物心もつかないうちに（姫君を紫の上に）譲り申し上げたらよいだろうか」と思う、その一方で、「（姫君を）手放して気がかりであろうこと、（姫君がいなくなって）所在なさも慰める方法がなくては、どうやって日々を過ごしたらよいのだろう（、いや、過ごしていけない）、（姫君がいなくなれば）何を理由にして（源氏の）まれまれのお立ち寄りもあるだろうか（、いや、なくなるだろう）」などとあれこれ思い乱れるので、我が身のつらいことは際限がない。